

平成19年 5月20日(日)

みなとまちづくり生涯学習講座 シリーズ うみ ふね みなと〔第1回〕

フローティングスクールの取組み—子供たちを船上で学ばせる意義—

神戸大学大学院 海事科学研究科教授

井上 欣三氏

<プロフィール>

神戸大学大学院海事科学研究科教授。
1968年神戸商船大学航海学科卒業。日本郵船株式会社を経て、1981年に神戸商船大学助教授、1990年に神戸商船大学教授となる。1992年には商船大学の「深江丸」船長を務め、2000年神戸商船大学副学長、2005年神戸大学海事科学部長を経て、現在は神戸大学大学院海事科学研究科教授。2002年に日本航海学会会長に就任、現在は名誉会員、英国王立航海学会アソシエイトフェローも兼任。



本日は、「うみ ふね みなと」、特に『海で学ぶ』をキーワードとして「海で何を学ぶか」、「なぜ船が学びの場所なのか」ということをわかりやすく説明させていただきたいと思います。

早速本題に入らせていただきますが、1995年の阪神・淡路大震災は誰にとっても大きな衝撃を与えるものでしたが、私にとって特に大きく心に残ったのは、うみ・ふね・みなとへの人々の関心についてです。

震災が起こる以前、何か災害が起こった場合には船を活用するという取り決めはありませんでした。しかし、震災が起こると、自発的に船は市民の足として活用されました。ハーバーランドからは大阪へ通勤するための船が出ましたし、市内で復興に当たる方々の宿泊施設「ホテルシップ」としてフェリーや客船が活用されました。多くの支援物資や救済物資も海を通じて運ばれてきました。復興の時期に至るまでの数カ月間、船が活躍したのです。しかし、震災が起こってから直後の3日間は船による支援活動がなく、4日目からようやく本格的に始まったというデータが残っています。

「海にも道がある」という意識が市民の生活に根付いていれば、すぐに船を利用することが出来たはずで。つまり、市民の皆様にも船の関係の方々にも、うみ・ふね・みなとへの意識が根づいてないことを私は痛感したのです。

人々の海への関心を呼び覚ますために大学人として何ができるのか。私はうみ・ふね・みなとを「教育」の場として用いることを考え、そしてうみ・ふね・みなとの市民への「意識啓発」を行うことにしました。日本は海洋立国であり、貿易立国です。海洋立国日本を真のものとするためには、次世代を担う若者たちに子どものときからうみ・ふね・みなとへの関心を高めることが一番重要ではないかと思ったのです。

震災から3年後の1998年、日本航海学会が創立50周年を迎えました。ちょうど日蘭修好400周年記念の年でした。当時、私が企画委員長をしておりましたので、そのシンポジウムと一緒に、うみ・ふね・みなとへの啓発を図る企画が出来ないかとパネルディスカッションを提案させていただきました。まず大阪商船三井船舶の名誉船長



柳原良平画伯より「なぜ船なのかー航海の意義・楽しみ・喜びー」というテーマで基調講演をいただき、その後、私が司会進行役を務め、「《若者に航海体験のチャンス》」をテーマにパネルディスカッションを開催しました。当時は多くの聴衆の方に来ていただき、それなりの成果が上がったと思います。事実、国や県、いろんなレベルで航海研修に誘う取

組みがたくさん行われてきているのです。その中から国、兵庫県、大阪市、神戸大学海事科学部、それから滋賀県といった我々の身近な取組みをピックアップしてご紹介いたします。



まず国の取組みですが、総務庁の青少年国際交流事業の一環として「世界青年の船」が行われています。これは明治百年事業の一つとして1967年に実施され、もう既に21航海が行われました。1988年からは青年の

船事業を青少年国際交流事業に発展的に改組し、世界青年の船事業に引き継がれています。青年たちが他国の方々と同じ船で生活、または寄港地で交流をすることによって国際的な視野を広め、国際協調の精神を養い、次代を担う青年を育成していこうというもので、世界的視野に立った議論や討議、自国文化の紹介などの交流、寄港地での産業・文化・教育施設の視察、さらにホームステイなどが行われます。

次に、兵庫県での取組みです。兵庫県国際交流協会で、「大学洋上セミナー」が行われています。兵庫県下の4年制大学で組織されており、第1回は1989年に「ひょうご洋上大学」として実施されました。1カ月間、中国、シンガポール、オーストラリア、インドネ



シアを訪問し国際交流を行うもので、最近では船の中で他国の人たちと一緒に研修するものもあります。もう既に14回行われ、6800人が乗船しております。

このプログラムの目玉は単位互換制度です。船上で開設されたプログラムを受講し、取得した単位は所属する大学の単位として認定されます。

大阪市でも、1994年に市が出資する大阪港開発技術協会により帆船「あこがれ」によるセールトレーニング事業が開始されました。航海のプログラムも多様で、10歳以上の子供

から大人まで幅広い年齢層の方々に乗船の機会を提供しております。



2004年、2005年には、近畿地方整備局の資金的支援を得て、私が実行委員長となり「わくわく調査船」という取組みを神戸大学海事科学部で行いました。このプロジェクトは、大学の練習船「深江丸」を使った体験型学習プログラムを提供するものです。阪神間から30名を募集した

ところ、多くの応募がありました。夏休みに中学生が調査隊員となって航海をし、寄港地で環境学習を行い、港の歴史・文化や港の機能などを調査しました。秋にはその調査結果を市民の方々に報告する場が設けられ、うみ・ふね・みなとの理解促進に役立ったと思っております。また、このプロジェクトは日本港湾協会から企画賞を受賞しました。

その後、その理念を引き継ぎ、私たち海事科学部と発達科学部の合同企画として附属小・中校の連携学習プログラムをつくることにしました。「附属明石中学校フローティングスクール」を開催しました。2005年から1泊2日「深江丸」での船上体験学習を始め、海の環境を調査する環境学習、港の歴史や文化を学ぶ社会科、船がなぜ動くのかを分析するなどの理科、機器の名称や船内用語の語源を知る英語、船上での位置の測定方法を学ぶ数学といったように、学校での学習と連携した取組みを行いました。

最後に、滋賀県の「滋賀県立びわ湖フローティングスクール」をご紹介します。1983年から始まり、もう25年目になります。きっかけは、先ほど紹介しました総理府の青年の船事業です。「滋賀県でも青年の船を」という機運が高まり、1982年に県議会でフローティングスクール



事業が決議されました。「うみのこ」という学習船を使って滋賀県内の小学5年生全員が1

泊2日の船上研修をするもので、これまでに既に45万人以上の子供たちが乗船しています。私はこのフローティングスクールの運営委員をしており、安全な運航や効率的な運用、さらには効果的な学習等に対していろんなアドバイスをさせていただいております。



この事業は、滋賀県の教育現場の先生方がフローティングスクールの先生として派遣され、「うみのこ」の運営や子どもたちの教育指導に当たるという大変ユニークな取組みです。その教育方針は、「友達とのふれあい」、「環境に対する意識」、「行動規範」、これら3本柱を教育の根本とした学習プログラムを「うみのこ」で体験す

ることで、人間形成に寄与するというものです。

具体的には、まず「ふれあい体験学習」です。「郷土・人とふれあう 共に学びあい 行動する」ということで、例えば人の話を聞く、人と話す、新しいものに見る・ふれる、心を一つにして助け合う、みんなとふれあう・交わる、人のよさや違いに気づく・見つける。その結果、それを学校や家庭や地域に持ち帰って友情、郷土愛、夢にフィードバックするというのが一つのテーマになっています。



2つ目は「びわ湖環境学習」。「琵琶湖に学ぶ 琵琶湖を通して学ぶ」というとても大きなテーマです。いろいろなものを調べる・観察する・見る・聞く・感じる・つくる・体感することから新たな感動体験を呼び起こして自ら考え、関心、疑問や課題を持ち、学校や家庭や地域に帰って課題解決を行う、またはそれに向

けて行動するものです。

3つ目が「うみのご船内生活」です。「集団生活をする 暮らしをみつめる」が大きなテーマになってきています。この取組みは、県内の小学5年生全員を対象としており、一校一校ではなく複数校が同時に狭い船内で一緒に活動・学習するというのは非常にいいふれあいの機会を与えることとなります。先生方は「友達」というキーワードを大事にされています。船の中で挨拶をする、安全に気をつける、後始末をする、みんなに協力する、気持ち思いやる、自分の役割を果たす、人の話を聞くということを通して、それが学校や家庭や地域に帰ったときに人を思いやる、ルールを守るといった豊かな心を育てていくわけです。



当初はこういった指導をご理解願えないことも多々ありました。私もフローティングスクールの10周年記念ぐらゐのときに、なぜ船なのかと多くの方から問われました。これは皆さん疑問に思われる点だと思います。ここからは「子供たちを船上で学ばせる意義」について説明させていただこうと思います。

1992年、大学公開講座のときに配った『海と航海』という冊子の裏表紙に、「快適な船内生活のために」という9項目の「しつけ」が書かれています。

船上では、なぜしなければならないのか、なぜしてはいけないのかといった「しつけ」を説明できます。家庭の中ではこのようなしつけはなかなかしにくいものですが、船はそれを必然的に課すことができます。なぜならば、「小社会」、「運命共同体」、「危険と隣り合わせ」、「国際性」といった船の特性が、子ども



たちに「しつけ」をすることを可能にしています。理解させながら最小限の生活のルールを身につけ、それが陸上での生活にもつながっていくのです。

まず「小社会」についてですが、船は小さな社会を形成しているということです。船は限られた空間であるため「閉鎖性」という特徴があります。そして、社会と隔絶された「離社会性」という特徴があります。また、そういう場所だからこそ、船の中で何が起こってもすべて自分たちで解決しなければならない「自己完結性」が要求されます。小社会での集団生活だからこそ協調の精神が要求されますし、狭い世界にたくさんの人がいるわけですから一人一人の人格を尊重し、人を思いやるという気持ちがなくてはなりません。

次に船は「運命共同体」であるということです。「運命共同体」である船の中では、各人がいろんな役割分担をしながら、みんなと協働で作業しなければなりません。そこで、チームワークが必要になってきます。また、最低限の組織の中でそれぞれが責任を持ちつつも、だれかがあるときにはリーダーシップをとらなければなりません。

3つ目は「危険と隣り合わせ」です。

失敗が事故につながる船の上では、ミスは決して許されません。ですから、そこには将来を読む注意力と洞察力が必要です。そのためには、秩序の維持と規律ある行動が必要となります。また一瞬の判断が生死を分けるということになりますので決断力も必要です。



そして、4つ目の特性は「国際性」です。船尾に立てられた国旗は権力、義務、法律の属する国を明示しています。船は国を代表する施設ですから、国際感覚を身につけていないと、いろいろ問題を起こしてしまいます。個人個人の礼儀やマナーはもちろんのこと、国際的な礼儀やマナー、国際儀礼、慣習も身につけていなければなりません。さらに、自分の国を背負った一人の人間ですので、国を代表する自尊心と自負心を持って外国の人たちと対応することも必要です。

今度は教育的視点から説明をまとめてみたいと思います。

新しく制定された海洋基本法のもとで貿易立国・海洋立国を目指そうという国が、うみ・ふね・みなとを学ぶ、または世界を知るという意識を見過ごしてよいはずがないのです。だからこそ次代を担う若者たちには海で学んで、船で学んで、世界を知ってほしいと

というのが私の願いです。これは、船の上で学びを体験することによって達成できるだろうと私は考えています。



まず「海に学ぶ」ことは、心にゆとりをもたらす海というフィールドを体験するということです。教育においてとても大切な、自然の偉大さを体感し、そして感動するのに、海は適した場所です。果てしなく広がる水平線に沈む夕日や満点の星空、空にかかる大きな虹を見て、自然の雄大さを体感してほしいと思います。

次に「船に学ぶ」です。船は団体生活や共同作業を通じて努力する、耐えるということを経験する場です。また、いろいろな人との交流を通じて連帯感、責任感、リーダーシップ等が育まれ、一つの仕事をやり上げたという達成感を得るという貴重な体験をすることができるのです。また、船は非日常的空間・環境であり、海からの視線で物を見ることができます。



大きな視野から物を見ることにより、発想の転換の基本である違う視点で物を見るということが育まれます。

そして「世界を知る」ことです。99.7%の物資が海運貿易によって日本に運ばれてきますが、その海上交通の玄関口となっているのがみなとです。こうしたみなとの機能的側面を若い人たちにきちんと知らせなくてはなりません。

加えて、海の道は世界に通じるものですのでみなとを理解することで国際性・人間性、そして日本人としての生き方が養われますし、船は人を育てるふれあいの場でありますので、情緒も養われます。うみ・ふね・みなとの3つが連鎖して世界に通じているものであるととらえることで、大きな成果が得られると思います。

今日は、「うみ」、「ふね」、「みなと」、「教育」をどう学びに活かし、リンクさせるかということで話を進めてまいりました。大きな自然の海に学び、小さな社会の船で生活をし、実生活に必要な規律や秩序を身につけて非日常的視野から問題発見の喜びと達成感



を味わう体験型教育を提供する、こういう試みやプログラムをもっともっと国内に広げてほしいです。現在国土交通省海事局の海事政策審議会の中でも、若い人たちに海に関心を呼び起こさせるような取組みについて議論がなされていますので、ぜひとも、市民ひとりひとりの意識に根付くまで広がってほしいと思います。

最後に、私の気持ちを述べさせていただきます。「海に学ぶ・船で学び・世界を知る」。次世代の人をつくる場としてここ神戸には一隻の学習船もありません。開港文化都市神戸にこそ、滋賀県に負けないようなフローティングスクールをぜひつくってほしい。もうすでに実績もあるのですが、将来は神戸に船を就航させ、神戸大学海洋科学部と発達科学部とが連携した神戸大学フローティング・スクールがあってもいいのではないかと考えております。兵庫県立でも神戸市立でも国立でも構わないので、ぜひとも神戸にそういう新しい世界を広げていきたいと願っております。その思いを持ってお話を終わりたいと思います。ご静聴、ありがとうございました。